

---

# ブランジア人魔戦記

長村

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブランジア人魔戦記

### 【Nコード】

N8617Z

### 【作者名】

長村

### 【あらすじ】

こことは異なる世界の、とある地方にあるブランジア王国。  
これは、人間と魔族の戦いの物語。

記憶喪失の少年、ショーマはあらゆる魔法を瞬時に覚えてしまう『能力』持っていた。望まない力を正しく制御出来るようにと望んだ彼は騎士士官学校において魔法を学ぶこととなった。

そこで出会う、誇り高き少女メルル。勇気ある少年レウス。そして、多くの仲間達。

彼らとの出会いにより、シヨーマの心に目覚める想いがあつた。  
出会い、夢を語り、ともに戦い、別れ、そしてまた出会う。  
その果てに、何を見えると言つのか。

## 始まりの1日（1）

鳳凰歴306年。30年に渡る西と東に並ぶブランジア王国とイーギリス王国の長い戦いは、イーギリス王国王都ロドニスへの奇襲作戦の成功により、ブランジア王国の勝利に終わった。

それから3年。復興の続くブランジア王国ではある問題が発生していた。戦争末期より急増し始めた『魔族』の脅威である。精鋭揃いとはいえ、長い戦で消耗し、治安維持活動にも戦力を割いていた騎士団ではこれに対応しきれずにいた。

そこで、300年以上の歴史において、多くの騎士を輩出した名門リヨール士官学校を一般にも開放し、若い力を広く育てることで、急ぎ騎士団の戦力を増加させることとなった……。

人魔戦争と呼ばれる新たな戦いの前哨である。

シヨーマ・ウォーズカは記憶喪失であった。

黒い髪に、見慣れぬ格好、高級そうな眼鏡をしたその不思議な少年は、山の中で倒れていたところを老人オードランに助けられ、少しずつでも自分の記憶を取り戻そうと、彼とその妻の三人で静かに暮らしていた。

しかし彼には、とても静かには暮らせないであろう能力があった。

魔法の『瞬間修得』である。

魔導師を志す者が最初に覚えるのに相応しいとされる初級魔法、『アイスショット』ですら、修得に2週間はかかるのが普通であるところを、彼は教本を一読しただけで修めたという。

初級魔法を容易く修得する……。それは才能ある者にはままある

ことではあったが、彼の能力はそうではない。高位魔法の『サンダー・ストーム』も同様に一読で修得したというのだ。2度ならば偶然で済ませたところであったが、後の検証により彼はさらに3度、計5つの魔法を同じように瞬時に修得したという。

記憶を失う前の彼は大魔導師であり、『修得した』のではなく『思い出した』のか。とも予想されたが、彼はまだ20にも満たない若者である。それは無いだろう。やはり、本当に彼だけの『特異さ』なのか。判断の難しいところであった。

いずれにせよ『経験の伴わない力』は彼自身をも危険にさらしかねない。そう判断したオードランは、ショーマ・ウォーズ力の正体を保留とし、彼を正しく魔法の修練ができる騎士学舎へと預けることを決めたのだった。

「とは言っけどね……」

当のショーマは正直途方に暮れていた。

穏やかに日常生活を送る程度には問題の無かったショーマの記憶喪失ではあったが、都会に出て集団生活を送るとなれば、さすがに面倒も多いに決まっているだろう。

まずは記憶を取り戻してから、と行きたいのだったが、恩人であるオードランのお爺さんの言うことも否定しにくい。自分の記憶を取り戻すことは確かに大事だが、他人に迷惑をかける危険性を孕んだままであることが良いことなわけが無いのだ。

急いては事を仕損じる。何もわからないなら、まずは今ある自分を固めてからだ。

オードランのお爺さんの経験則らしい。

「うん、そうだな。……頑張ろう」

厳かな石造りの門。リョール士官学校を前にしてショーマは1人、決意を固めていると、

「ああ、頑張ろう！」

「うわっ」

いつの間にか隣に立っていた同世代くらいの少年に同意された。緩やかに波打つ金髪と、育ちの良さを感じさせる柔らかな笑みが印象的な少年だった。もちろん、今の記憶には無い人物である。

「ええっと……」

たじろいでいると、金髪の少年は自分から語り始めた。

「僕はレウス。レウス・ブロウブ。君がショーマ・ウォーズ力君だね。兄から話は聞いているよ」

レウスと名乗った少年は気さくそうに微笑んだ。

ショーマもブロウブという姓には覚えがあった。オードランと暮らしていた小さな山村であるリウル村から、ショーマをこの学術都市リョールまで連れてきてくれた上、士官学校の入学や生活する寮の手配までしてくれた人物だ。手際良く物事を進めていく様子は、少し見るだけでも彼の優秀さを感じさせた。

なんでも騎士として歴史のある結構な名門の家系だとか。

「あ、ああ。その節は本当にどうもありがとう。こっちも色々大変でさ。本当、助かったよ」

「どういたしまして。……申し訳無いが、兄はあれで結構忙しい人なんだ。だから学校では、代わりに僕が君の助けになろうと思う。ちやうど同じ時期に入学する事が決まっていたし。構わないかな？」

裏の無い笑顔にショーマは安心感を覚える。今の彼にとつて、当てにして良い人物がいるというのは、それだけで随分と心を落ち着かせてくれるものだった。

「ああ。ありがたい話だよ。迷惑をかけると思うけど、どうぞよろしく頼む」

そつと手を差し出すショーマ。レウス気の良い笑顔ではそれをぎゅっと握り返した。

入学式は式というほど大袈裟なものではなく、学長による挨拶程度で終わってしまった。そんなことに時間を割くなら、生徒達は1秒でも多く教練に励めということである。

「……その髪はこの国の生まれでは無いよね。やっぱり外国から何かの用事でやって来たけれど、不幸な事故か何かで……。つてところかなあ。やっぱり」

ショーマ達新入生は最初の授業が始まるまで教室で待機中である。退屈をもて余す学生達は、新しい友人達と交流を深めるため談笑中だ。

そんな中ショーマは、人の少ない一番端の席について、レウスと自身のことについて相談していた。

「でも隣国のイーギリスにもそんな髪の人はいないし、もっと遠くからかな？」

ここブランジア王国や東に隣接するイーギリス王国の民は金髪や茶髪がほぼ全てである。ショーマのような黒髪はまずいない。よってレウスは彼をイーギリスより、さらに東方からの出身ではないかと予想した。ブランジアの西はかなり広い海しか無いので、海を越えてきたという可能性は低い。ゼロでは無いが。

「でも敗戦の影響でまだまだ治安の安定しないイーギリスの国境を1人で越えられるとは思えない。もしそうなら仲間がいるんだろうけど、捜してくれている様子も無い。君のような目立つ人を捜しているなら噂も聞くはずだがそれも無い。その眼鏡はそこそ高級な物のように見えるし、それなりの身分であるならなおさらだ。」

この国の地理に関する記憶も無いショーマにとって、次々と情報を挙げてくれるレウスは心強い。出てくる結果は空しいものばかりだったが。

「うん。……本当、何なんだろうね。俺は」

真剣に考えてくれているレウスに、シヨーマは嬉しさと共に申し訳無さも感じてしまう。

「あまり急がなくても良いよ。今はまず魔法の勉強からしてみたいしさ」

「そうか、うん。わかった。そう簡単に結論は出ないか」

話が一区切りしたので、2人は軽く教室の様子を見渡す。

120名の新入生は3つの教室に分けられ、今は40名の生徒達がこの教室に詰め寄っている。

「本来は貴族や騎士の家系か、その推薦を受けた人しか入学できなかったんだけどね。魔物の増大に対してその考えは改められたみたいだよ。平民からもたくさん志願者がいて、例年に比べると倍以上の新入生らしい」

「へえ……」

と、言われても貴族や騎士、平民の違いなどシヨーマにはよくわからない。これがどれくらい多いのかというのもぴんときなかった。「でもやっぱり名のある騎士の生まれも多いみたいだね」

「……俺にはわからないよ」

「はは、そうだね。例えば、あそこにいるのはガランマ家の次男だし、あつちで人だかりが出来ているのはララー家の三男。それから、目の前の席にいるのがドラニクス家のご令嬢。だよね？」

話の流れとはいえ、突然前の席にいた金髪の少女に身を乗り出して話しかけるレウスにシヨーマは少し驚く。気さくだとは思っていたが。

声をかけられた少女はゆっくりとこちらに振り向いた。

「……こんにちわ」

美しく気品のある金髪と、宝石のようにきらめく碧眼、決め細やかな肌とで整った顔立ちの、いかにもな美少女であったが、笑顔のレウスとは対称的な、機嫌の悪そうな仏頂面がそれを減じていた。

「……なにか嫌なことでもあったのかな」



「貴方に話しかけられたせいかしらね」

「ひどいなあ」

2人は軽口を交わしあう。どうやら顔見知りであるらしい。シヨーマが置いてきぼりにされた気分でいると、レウスはすぐに彼女を紹介してくれた。

「ああ、こちらメリル・ドラニクス嬢。彼女の家と僕のブラウブ家は昔から家族ぐるみで付き合いがあつてね。なんだか僕は彼女に嫌われているようだけど」

確かに愛想が良いと言えば良いのだが、裏を返せば馴れ馴れしいとも言える。それがレウスという少年だった。シヨーマにはそれがありがたいのだが。

「メリル、彼はシヨーマ・ウォーズ力君。僕の友人だ」

「あ、どうも。よろしく」

どんどん話を進めてしまふレウスに戸惑いつつも、シヨーマはメリルに頭を下げる。

「……こちらこそ、よろしく」

メリルは短いながらも確かに笑みを返した。明らかに態度が違う対応だが、レウスは特に気にしていないようだった。

ざわつく教室の扉を開き、恰幅の良い初老の男性が入ってくる。

手にはいくつかの資料を持っている。彼が指導教員のようだ。

「はい静かに。……えーどうも。指導教員のボンボーラです。少々遅刻してしまいましたが、数分程度。まあ気にせずいきましよう」

1秒でも多く教練に励めと言われた覚えがあつたが、シヨーマは気にしないでおいた。

「えー早速。諸君らの今後ですが。えー学生諸君はまず目標とする『クラス』を決めてもらいまして、それを目指して、各授業を選択して参加し能力を身に付けていき、最後には是非とも立派な騎士に

なつて頂きます」

『クラス』というのは騎士達に与えられる戦闘スタイルに基づいた称号だ。それくらいはシヨーマも事前に勉強している。

「えーまず、授業には実技講習と筆記講習があり、実技は選択式ですが、筆記は必修ですので、サボったり遅刻など無いよう。こちらでは騎士としての心構えや教養、戦闘行動に際しての戦術や戦略など『クラス』に依らない内容を学びます。

えーそれで肝心なのは実技講習についてです。武術系4科目、魔法系4科目の計8科目から自由に選択して、戦闘訓練を受けてもらいます。

武術系4科目の内訳は『剣術』、『槍術』、『拳術』、『弓術』。魔法系4科目の内訳は『黒魔法』、『白魔法』、『竜操術』、『薬師術』となります。えー内容はだいたい説明するまでも無いでしょうが……」

説明するまでも無いと言われても困る人物は1人いた。

「なあ、武術系4つと白黒魔法はわかるけど竜操術と薬師術って？」  
シヨーマは小声で隣席のレウスに尋ねる。

武術系は剣、槍、拳、弓。それらを扱う武術を学ぶ、というのはすぐわかる。白魔法と黒魔法もわかる。それを容易く修得してしまったから彼はここにいるのだから。

しかし竜操術と薬師術は、知らないか覚えていない。字面通りの意味で良いのだろうか。竜を操る？

「竜操術は端的に言えば特殊な魔法技術だね。基本は同じだけど竜族の力を借りてさらに高位の魔法が使えるんだけど、結構難しくてあまり使う人もいないから、僕も詳しくはわからないよ。メリルが詳しいから後で聞いてみると良い」

前の席に座るメリルに目を向ける。彼女はそ知らぬ振りでじつとボンボーン教員の話に耳を傾けている。

（難しい高位魔法ね……。結構すごい子だったのか）

「薬師術は薬草の調合を行う『クラス』だけど普通の薬剤師とは違

い、魔法の力を織り混ぜるんだ。普通の魔法と違って薬の力にも頼るから準備に手間がかかるけど、そのぶん利便性に優れる技術だね。魔法の心得はあるけど、それだけで戦うには心許ない人向けかな」  
「なるほど。ありがとう」

ボンボーラ教員の話に意識を戻す。

「えーどれか1科目を全て修めることで卒業が可能となりますが、実際騎士の称号を得ようとするならば、えー1科目だけでは難しいところですので、別にもう1科目の半分だけでも修める事を薦めます。理想は2科目ですが、……えー少々覚悟がいると思われるね。それ以上は体を壊しかねないのでお薦めはしません。若者は無鉄砲が取り柄と言いますが、無理はしないよう」

3科目は相当きつい、と。2科目でもちよつと大変だそうだが、自分の能力を活かせば白魔法と黒魔法での2科目なら比較的簡単かもしれない。それで満足しておこつ。そもそも騎士になり来たわけでは無いのだし。

とショーマが思っていると、学生達の中から1人が声をあげた。

「先生！ かしいずれ將軍クラスまで目指すのであれば、3科目以上は目指すべきだと思いますが！」

濃い色の肌をした、気の強そうな男子生徒だった。挑むような目付きでボンボーラ教員を睨み付けている。

「……無理はしないようにと言いました。志を高く持つのは良いですが、ここでの教練だけが君の騎士としての全てになるわけでは無いのですよ」

「それでも早いに越した事は無いでしょう！」

……これは食い下らない。そう素早く判断したのかボンボーラ教員の方が先に折れた。

「出来ると思うのなら、精々頑張りなさい。」

……えー、それでは。授業の選択は自由ですがおおよその参加人数は把握しておく必要があるの、こちらの用紙に名前と希望科目を書いて本日中に提出してください。期限は短いですが戦場でのん

びり悩んでいる暇は無いとも思っ、さくつと決めてください。  
えーそれでは本日は解散とします……。この後は興味のある科目の  
様子を見学する時間に当ててください」

ボンボーラ教員が退室すると、教室はまたにぎわつき始め  
た。

「さっきの彼、すごい剣幕だったな」

「うん？ ああ、そうだね。まあそういう人もいるよ。將軍クラス  
ともなれば地位も名誉も得られる富も相当なものだからね」

「地位に名誉ね……」

「それよりシヨーマ、君はどの科目を受けるんだい？ やはり白魔  
法と黒魔法かな」

何か話をそらされた気がするが……気のせいだろうと判断した。

「ああ。ひとまずはね。レウスは？」

「僕はその2つと剣術かな」

レウスはしれつと3つの科目を挙げた。

「……大変なんだろ？ あ、まさか」

「気にしないで良いよ。ちゃんと入学する前からその3つを選ぶつ  
もりだったからね。」

……名門ブラウブ家の一員である以上、末の弟とはいえそれは当  
然のように望まれることだし、成し遂げる覚悟もあるよ」

それは先程の男子生徒とはまた違う強い意思を感じさせる物言い  
だった。

「……かっこいいなあお前」

「そうかい？ 照れるな」

そう言っレウスは本当に照れ臭そうに笑った。

正直な男である。

「あ、メルルはどうするんだい？ 竜操術以外にも受けるの？」

照れ隠しか、レウスは前の席にいるメリルにも話を振った。

「……………はあ」

「どうしたのさ」

「私も黒、受けるのよ」

ため息をつきながらメリルは答えた。

「へえ。それじゃあ3人一緒だね」

「そーね」

嬉しそうなレウスと、そして対称的にダウンナーなメリルであった。ひよっとしてこれが定番の調子になるのだろうか。そんなことをシヨーマは思った。

## 始まりの1日 (2)

レウス・ブロウブは騎士の名門、ブロウブ家の三男として生を受けた。騎士と、騎士を志す者からは、その名だけで期待と信頼と羨望が集まることを宿命付けられたレウスは、しかし真っ直ぐな心を持ちながら育ち、他者の助けとなれるよう自らを鍛えることを惜しまなかった。

そんな彼はやがて、人魔戦争においてその名を広く知られることとなる。

ショーマ、レウス、メリルの3人は揃って8つの科目を順番に見学して回ることにした。

自分の受ける予定の無い科目も見えておいた方が良く、というのはレウスの談である。

ざっと見てきたところ、武術系4科目は体力向上のための基礎鍛練や、各武具を用いた技能訓練など、傍目にも分かりやすいものだったので軽く済ませて終えた。

現在は白魔法科の行われる教室に向かっているところである。

「あ、そうだメリルさん」

「なに？」

「突然こんなこと言うのもなんだけど、俺、実は記憶喪失なんだ」

「本当に突然ね」

「悪いね。そのせいで……その、非常識なことをしたり、時々変なことを言うかもしれないけど、そういうこと承知しておいてほしい」  
「さらっと言ってはみたが、ショーマとしては、実は少々勇気のいる告白だった。」

「まあ、色々込み入った事情がありそうなのは察していたけど……」

メリルの視線はシヨーマの黒い髪に向かっていた。この国では見ないであろうそれは、彼女にとっても気になるところであった。馴染みの無い風貌に聞き覚えの無い家名。レウスが目をかけていたのにもただのお人好しでは無いと察してはいた。

「記憶喪失ね……。どんなことが思い出せないの？」

「名前は思い出せたけど、1ヶ月ほど前、リウルの村で目が覚めた時より以前の記憶がさっぱりとね」

「さっぱり？」

「うん。どこで誰とどんな暮らしをしていたのか。全然だめだ」

「それはまた……。重症ね」

「あとはまあ、日常生活はわりと問題無いんだけど、魔法とかは…

…」

「そう……」

「これから魔法科の見学だけど、変なことしたり、言ったりするかもしれないけど、驚かないでくれよ」

「うん。それは良いけど……。ていうか記憶喪失のまま騎士志望なの？ 貴方」

「ああ、いやそれはそれでまた色々あって」

「もう着いちゃったよ、シヨーマ」

結局話の終わらない内に白魔法科の教室に到着してしまった。

「ああ、えっと続きは、後で」

我ながら簡単に説明できない事情を抱えているものと、シヨーマは改めてそう実感した。

白魔法科の教室に入ると、担当教員と思われる女性から声をかけられた。

「あら、貴方、ひょっとして例の……？」

女性教員はシヨーマの黒髪を見て判断したらしい。学校へは彼の

能力はすでに連絡が行っているのだ。

「はい。彼がショーマ・ウォース力です。もう話は聞いて頂けていますか」

「ええ、はい……、あ、では貴方がブロウブ家の？」

「はい。レウスです。よろしく願います」

「わかりました。あ、私白魔法科教員のエルメーラと言います。……皆さんもう他の魔法科には行きました？」

「いえ、3人ともここが最初です」

てきばきとエルメーラ教員との会話を進めるレウス。その後ろではメルルが何やら言いたげな視線をショーマへと向けていた。

特別な事情……一般生徒には特に縁の無さそうな。そういうものを先程の会話から推測させられただろう。

「ではこちらに。魔法科ではまず最初に魔導力の測定を行いますので……」

「……………」

「……………」

ショーマとメルルは無言のままエルメーラ教員の後へ続いた。

3人の前に置かれたのは無色透明な水晶玉だった。

「この水晶に手を置くと、魔導力の属性と強さが現れます。あんまりに反応が微弱だと、魔法科を受けるのはお薦めできないかなってなっちゃうんですけどね」

エルメーラ教員が説明する。ショーマには魔導力という言葉に覚えが無かったが、字面から予想くらいはついた。

「まあそんな心配は滅多に無いでしょうけど。……どなたからやります？」

「じゃあ僕から」

特に相談もなくレウスが一番手を宣言し、水晶に手を乗せた。

すると、無色透明なはずの水晶の中に、どこからともなく黄緑色の煙のようなものが漂い始めた。煙は水晶の中をふわふわと漂って



いる。

これが魔導力の属性と強さというやつであろうか。シヨーマにはこれがどういう結果なのか、どういう仕組みでこうなるのかもさっぱりわからなかった。

「はい、もう良いですよ。次の方は？」

エルメーラ教員は結果をメモしながら次の人物を催促した。

「シヨーマ、やってみなよ」

「え、俺？」

「手を置くだけだよ。難しいことは無いだろう？」

「あ、ああ……」

レウスが水晶から手を離すと、黄緑色の煙も消えた。それを見てシヨーマもそつと水晶に手を乗せる。

現れたのは黒い煙だった。

「うわ」

特に何か力を込めたわけでもなく、本当に手を置いただけで煙が現れた。

しかしどこかおどろおどろしさを感じる真っ黒な煙には、少し背筋が寒くなる。

「おお」

「あ、すごいですねえ。全属性ですか」

レウスと女性教員は揃って感心しているようだった。

「全属性？」

「あ、勢いもすごいですねえ」

「え」

黒い煙はレウスの黄緑色の煙と違い、強めの勢いで水晶の中をぐるぐると漂っている。

何が何やらわからないでいると、レウスが解説を始めた。

「これは色が属性、煙の漂う勢いが強さを表しているんだ。全ての色が混ざっている黒はつまり全ての属性を表す。勢いも強いし魔導力の強さも相当な物のようだね」

「要するに……?」

「君にはすごい魔法の素質があるってことさ」

今更と言えば今更な事実ではあった。

瞬時に魔法を修得する能力。それはもちろん覚えた魔法を行使出来るということでもある。実際に強大な魔法を放ってしまったこともある。

……これが魔法の素質がある、と言わなければ何だと言うのか。だから別段驚くことではない。シヨーマ自身と、その事情を知る者にとっては。

「ふーん………」

そうで無い者が1人。メルルだった。

「ずいぶんとまあ……すごいものを持つてるのね」

その言葉を驚きと苛立ちの混ざったような物言いだと、シヨーマは感じた。

「ああ、まあ、ね……。自分でも何でこんなことになってるかわからないし。それと……」

「まだ何かあるの?」

「さっきの話の続きでもあるんだけど……」

「にわかには信じがたいわね……」

シヨーマは自分の持つ『瞬間修得能力』のことについて、改めて話した。その能力ゆえ、この士官学校への推薦状が得られたことまで。

「学校側でも、彼に関しては色々と配慮するように言われているんです」

エルメーラ教員が補足した。

「魔法を教える分には楽で良いんじゃないか。なんて冗談めかして  
る先生もいるんですけどね。フフ」

エルメーラ教員は呑気そうに笑った。

「……でも、良い印象を持たない人もいるんじゃないかしら。特に  
同じ学生なんかは」

しかしメルルはそれほど楽観的では無かった。

「ああ……」

言われてみれば、そういうことは、確かにあるかもしれない。自  
分のことばかりで手一杯だったショーマは、そういう考えには至っ  
ていなかった。

「記憶喪失はともかく、この事はあまりおおっぴらにしないほうが  
良いかもね」

「……そんなに隠し通せるものでも無さそうだけど」

「その時はまあ、その時だよ」

「あ、私もそう思いますよ。学校外の人にも、あまり言いふらさな  
い方が良いと思います」

「……そう、ですね」

ショーマが初めて魔法を修得してしまったとき、それがどうい  
う物だったのかもわからずに、その魔法、『サンダーストーム』を不  
意に発動してしまったことがあった。

オードランの育てている畑の半分ほどを吹き飛ばしてしまい、随  
分と迷惑をかけてしまった。彼は笑って許してくれたが、ショーマ  
は自分が恐ろしくなった。もしこれが人の多い場所であつたら……。  
そんな折、ちゃんとした学習のできる士官学校への推薦は、不安  
もあつたが安堵もあつた。希望があつた。

けれど今、それを疎ましく思う者もいるかもしれない。というこ  
とに気付いた。……それは少し、悲しいことに思えた。

「まあ、良いわ。そろそろ私と変わってもらえる？」

「え？」

ぼんやりしていたシヨーマは、メリルが何の事を言っているのか、一瞬わからなかった。

「水晶」

「あ、そっか。ごめん」

ずっと水晶に手に乗せたまま話を続けていたことにも気づいていなかったようだ。

「まったく」

シヨーマが手を離すと、すぐにもメリルは水晶に手に乗せた。さつさと済ませようとばかりに。

メリルの手は細くしなやかで、丁寧に磨かれた爪などさりげないところからも気品のようなものが感じられた。

（綺麗な指だな）

彼女の魔導反応は綺麗な紫色の煙で、勢いはシヨーマのそれより少しゆっくりめ。といった所だった。それでも結構な勢いがあるようだ。

「赤と青の綺麗な2属性ですね。強さもかなりある」

「彼に比べたらどうってこと無いですよ」

「いやいや、新人生でこれは相当すごいですよ」

エルメーラ教員は素直に感嘆しているようだった。

「彼女はドラニクス家の生まれなんです」

「ああ、そうだったんですか。いやさすがです」

メリルは横からのレウスの評価に澄まし顔であったが、よく見ると笑みを押さえるようになっているようにも見える。

「はい、それではこちらが結果の控えです。別の魔法科目を見に行くときはこれを見せてくださいね。もう1回検査しなくても済みますので」

「ありがとうございます」

3人は先程の結果が書かれた紙を受け取ると、次は教室の様子を見学し始めた。

「この教室では魔法の術式や実戦における使用ノウハウなんかを学ばんです。実際に発動する訓練は別の場所で行われる事が多いですね」

教室といってもボンボラ教員の話聞いたあの教室とは趣が異なり、特に目立つのは大量の本と本棚である。

「あ、その辺にあるのは魔法の教本ですから……ウォーズ力君は読んだだけで覚えちゃうんですね……。あんまり迂闊には開かない方が良いでしょう……」

「あ、そ、そうですね。気を付けます……」

「ちゃんとした授業は明日からですので。今日はこの辺で」

「ありがとうございます」

見学を済ませ、教室から退室しようとする。

「あ、ショーマ、彼だよ」

レウスがさきほどの水晶玉で魔導力の測定をしている生徒に気が付いた。

「ああ……」

ボンボラ教員に噛みついてた濃い肌の色をした男子生徒だった。何やら渋い顔をしている。

「おい」

レウスはさっそく近づいて声をかける。

「……はあ」

またか、とため息をつきながらメリルは彼の様子を目だけで追う。「君もこれから魔法科の見学かい？ 良かったら一緒にどうか。同じ教室に集まったよしみで」

レウスは気さくに話しかけている。ショーマとメリルはそれを少

し離れた場所から見ているだけだ。

「いつも……あんな調子なの？」

「……そうみたいね」

「僕はレウス・ブラウブ。君は？」

「ブラウブ……？」

男子生徒はその名に思うところがあるのか、少し考えた後、

「デュラン、だ」

家名までは名乗らなかった。

しかしレウスは気にすることなく笑顔で手を差し出した。

「デュランか。よろしく！」

デュランは水晶に乗せていた手を下ろし、ゆっくりと握手をかわした。

「白魔法ってことは、君はやはり……『聖騎士』を？」

「ふん……。見ただろう？ 今の反応。微かに真っ白な煙が見えただけ。魔法の才能はからつきしってことさ。そんなんで『聖騎士』なんて……」

「鍛えれば伸びるものだよ。そう簡単に諦めない方が良いと思うな」  
「どうだか……」

デュランは寂しそうに笑うと、そっとレウスの手を離れた。

「俺は1人で回るよ」

「そうかい？ ……お互い頑張ろうね。それじゃ」

「ああ」

デュランと別れたレウスが、ショーマとメリルのもとに戻ってくる。

「駄目だったか」

「うん。……でも想像してたより良い人そうだったよ」

「ふうん」

レウスは彼を気に入ったようだった。少し話ただけだろうに、

そうわかるものなのだろうか。シヨーマにはイマイチ疑問だった。

「まあいいわ。早く次、行きましようよ」

こうしてちょっとした出会いを経て、3人は次の教室へ向かうのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8617z/>

---

ブランジア人魔戦記

2011年12月27日01時52分発行